健康ガイド

教えて！医学

急性期脳卒中における画像診断の役割

川口市立医療センター
画像診断センター 放射線技師 小玉（こだま） 賢治（けんじ）

急性期脳卒中（脳出血・くも膜下出血・脳梗塞）の初期画像診断にはCT検査やMRI検査などが用いられます。
CT検査は、検査時間が短いことから脳出血の早期診断に非常に有用なため最初に行います。そこで、脳出血が確認できない場合には脳梗塞が疑われるため、MRI検査を行います。
MRI検査では、急性期の梗塞部位の検出に有用な組織内の水分子の拡散運動を画像にする「拡散強調画像」や、脳内の血管のみを画像にする「MRA」などを撮像します（最新のCT検査ではCT灌流（かんりゅう）画像検査が脳梗塞の診断や治療方針の決定に活用されることもあります）。
急性期脳梗塞と診断されると、カテーテルを使った治療を要するため、より詳細な血管撮影検査を行い、閉塞している血管を再び流れるようにするための治療（血栓回収術）を行います。血管撮影検査では、カテーテルを目的の血管まで誘導し、血栓を直接取り除きます。
急性期脳梗塞は、早期に治療を行うことで重い後遺症の発症を免れる可能性があります。そのため画像診断センターでは、CT検査・MRI検査・血管撮影検査・血栓回収術までの時間を短縮するため、脳神経外科医・診療放射線技師・看護師などのスタッフが1つのチームとなり診療に臨んでいます。
埼玉県は急性期脳卒中治療を迅速に提供するため、平成30年に消防機関と医療機関が連携し、「埼玉県急性期脳卒中治療ネットワーク（Saitama Stroke Network：SSN）」を整備しました。当院もSSNの基幹病院として参画し、24時間365日、患者の受け入れが可能な体制を整えています。

すこやか生活習慣

～5月23日は「難病の日」～

平成26年5月23日に「難病の患者に対する医療等に関する法律」（難病法）が成立したことを記念し、患者や家族の思いを多くの人に知ってもらう機会とすることを目的に、（一社）日本難病・疾病団体協議会により、毎年5月23日を「難病の日」としています。
難病は人口の一定の割合で発症するといわれており、決して特別なものではありません。あなたやあなたの家族・親戚、あるいは友人や会社の同僚の中にも難病で療養されているかたや治療を続けながら働いているかたがいるかもしれません。そうしたかたに想いを寄せる日にしてみませんか。

「指定難病医療給付制度」をご存じですか？

指定難病（原因が不明で治療法が確立されていない、いわゆる難病のうち厚生労働大臣が指定する疾病）は現在**348疾病**あり、埼玉県の審査を受け認定されたかたは、治療に係る**医療費の一部が助成**されます。

対象者	指定難病に罹患しているかた
対象となる医療の範囲	指定難病や当該指定難病に付随して発生する傷病に関する医療など ※文書料など、保険適用外の費用やサービスは対象外です。

<医療給付を受けるには？>

支給認定申請を行う（市保健所に提出）
※難病指定医が作成した臨床調査個人票（指定の診断書）などの申請書類が必要です。
※申請書類は埼玉県ホームページからダウンロードできます。（市保健所窓口でも配布しています）

↓

埼玉県の審査を受ける

↓

埼玉県から認定されると医療受給者証が交付される
※交付まで2～3カ月程度かかります。

埼玉県ホームページ

※詳細は埼玉県ホームページをご確認ください。

問 疾病対策課 ☎048-423-6708 FAX048-423-8852

人（ひと）

女性救助隊員が切り開く未来

南消防署南平分署水難救助隊 鈴木（すずき） 宏美（ひろみ）さん
北消防署消防課救助隊 中村（なかむら） 茉奈（まな）さん

火災や水難・交通事故など危険と隣り合わせの災害現場で活動する人命救助の精鋭集団「救助隊」。専門的な知識と技術を駆使し、あらゆる現場で救助活動を行う。屈強な男性隊員たちが集まるこの隊に、今春、埼玉県初の女性救助隊員が川口市消防局で二人誕生した。「女性隊員が対応した方が安心してもらえる場面もあると思います。日々の訓練で技術と自信を身に付け、チームの一員として救助活動に精いっぱい取り組みます」と語る水難救助隊員の鈴木さんと、「障害物などで狭くなった災害現場では小柄な自分が活躍できることもあるはず。まずは一人の救助隊員としてできることから取り組み、真摯に救助にあたっていきたいです」と語る救助隊員の中村さん。厳しい訓練を乗り越え救助隊員となった二人は、市民の安全を守るために日々奮闘している。

幼少期から水泳が得意で泳ぐことが好きだった鈴木さん。大学のライフセービング部の活動で直面した水難事故をきっかけに救助隊員になる決意を固めた。「事故に動揺していた自分とは対照的に、救助隊員の迅速な処置や的確に指示を出す姿を見て、自分も命を救う行動がとれるようになりたいと救助隊員を目指すようになりました」と当時の決意を振り返る。

一方、子どものころから体を動かすことが好きで、バスケットボールと共に学生生活を歩んできた中村さん。バスケットボール部の顧問になるという思いを胸に教員を目指していたが、就職活動中のある日、両親から言われた「女性の消防隊員とかいいんじゃない？」という何気ない一言がきっかけで消防の仕事に関心を持つように。「消防の仕事を調べていく中で、人命救助の最前線に立つ救助隊員の活動に強い憧れを持つようになり、やりがいを持って取り組めるのではないかと思い志しました」と語る。

川口市消防局に入庁した二人は、共にこれまで火災対応を主な任務とする消防隊員として日々職務に励んできた。火災現場に出場した際には、「炎の熱さや緊迫した空気感に圧倒されてしまって…（鈴木さん）」「現場の悲惨な状況を目の当たりにしてショックを受けてしまい…（中村さん）」と当初は訓練どおりに動けないこともあった。だが、多くの尊い命を救いたいとの強い思いが心の支えとなり、先輩たちのサポートを受けながら着実に任務を果たしてきた。

その後も実務経験を積み、二人は入庁当初から希望していた救助隊員になるために必要な「救助技術研修」に率先して志願した。器具を使わず自分の力だけでロープをつたって移動する渡過訓練や、重い人形を背負い三連梯子をひたすら昇り降りする背負い救出訓練など、体力的にも精神的にも厳しい訓練が凝縮された約2週間の研修。途中でくじけそうになることもあったが、救助隊員になった自分を夢見て乗り越えた。

努力のかいもあり晴れて救助隊員となった彼女たちは災害発生時に的確な対応ができるよう、厳しい訓練の積み重ねや機器の整備など日々の準備を怠らない。「現場を想定した訓練を積み重ねて、多くの人を助けていきたいです（鈴木さん）」「自分の活動を通して市民のかたの笑顔を増やしたい。初心を忘れず取り組んでいきます（中村さん）」笑顔で語る二人の熱意と努力は、女性救助隊員の未来を切り開き、これからも多くの命を救う力となる。（隼）

左から中村さん、鈴木さん